

平成 18 年 3 月 28 日
気象庁予報部

「台風情報の表示方法等に関する見直し案」への意見照会について

2006年2月2日に開催された「台風情報の表示方法等に関する懇談会」（第2回）において、台風情報の表示方法等について以下の見直し案が了承されました。

- 予報円と暴風警戒域の円が重なるなどして見えにくい場合は、一部予報時刻の表示を省略できる。
- これら円がさらに重なり見えにくい場合は、暴風警戒域の円の表示に代えて接線で表示できる。
- 付加的情報として、予報円の中心点、線を表示できる。
- 台風時における細かな防災対応判断を支援する情報として「暴風域に入る確率の面的情報」を台風予報の図表示に加えて表示できる。
- 台風から温帯低気圧に変わっても、暴風を伴って災害を及ぼすような場合には、台風情報として発表を継続する。

新しい台風情報の表示方法等の策定にあたり、国民の皆様のご意見をいただくため、2月28日(火)から3月12日(日)までの期間、気象庁ホームページ上において見直し案に対しての意見照会を行いました。その結果、当該ページへのアクセスが1,345件あり、ご意見が4件寄せられました。

これらのご意見につきましては、新しい台風情報の表示方法等の策定の際の参考にさせていただきました。ご協力を賜りありがとうございます。

なお、これらのご意見に対しての気象庁としての対応を別添のとおりまとめました。

ご意見への対応について

「台風情報の表示方法等に関する見直し（案）」に対する気象庁ホームページを通じた意見照会を2月28日(火)から3月12日(日)まで行い、国民の皆様からご意見をいただきました。

そのご意見の指摘要旨とそれに対する気象庁の対応を取りまとめました。

【予報円などの省略】

指摘要旨	対応
台風の進行速度が遅い場合、重なりのできる時間帯の予報を省くべきである。	(気象庁案を支持した意見)

【点と線】

指摘要旨	対応
<ul style="list-style-type: none"> 台風の中心が一番恐ろしいという視聴者の固定観念を変えることが重要であるため、台風の中心位置を予報する予報円を廃止すべきである。 上陸2～3日前の予報円は大きく日本のどこに上陸してもおかしくないように思えるため、進路予報は円ではなく線で正確に表すべきである。 	<p>予報円を廃止し予報の中心点と線で表示することは、進路予報に誤差がないとの誤解を与えることにつながりますので、予報円の廃止は適当ではないと考えています。</p> <p>台風の中心部だけに警戒が偏るような固定観念がもたれないよう、周知に努めていきます。</p> <p>なお、予報円を小さくするよう、引き続き台風予報の精度向上に努めてまいります。</p>

【暴風域に入る確率の面的情報】

指摘要旨	対応
暴風警戒域ではなく、暴風域に入る確率の面的情報を表示すべきである。	<p>有識者懇談会において、「長年使用してきたものを急に止めて新しいものに変えると情報の意味が正しく伝わらない可能性が高い」との指摘がありました。</p> <p>このため、当面は、暴風域に入る確率の面的情報を従前の台風進路予報図の付加的な情報として表示します。</p> <p>なお、ご指摘については、暴風域に入る確率の面的情報の普及をふまえて検討してまいります。</p>

<p>暴風域に入る確率は期間を通した分布図ではわかりにくいいため、時間ごとに区切った表示の方がよい。</p>	<p>1枚の図で示すときには72時間後までの期間を通した確率の分布図を表示しますが、ホームページ等では、ご指摘のとおり、3時間ごとの分布図をコマ送りで表示できるものも用意する予定です。</p>
--	--

【台風から変わった温帯低気圧】

指摘要旨	対応
<p>昭和61年台風第10号のように、台風から温帯低気圧になっても雨の降り方がまったく衰えなかった場合があるから、風だけでなく雨に関する情報も台風並みに発表してほしい。</p>	<p>台風時の大雨は、台風が直接影響するものの他に、前線や地形の影響など台風の位置と異なる場所で発生するなど、雨の降り方が様々です。</p> <p>このため、台風の有無にかかわらず、大雨の際には大雨警報等を発表するとともに、気象情報の中で大雨の状況や見通しを解説し災害に対する注意・警戒を呼びかけています。</p> <p>なお、ご指摘のような事例については、温帯低気圧の特徴を持つようになった後も各地で暴風があったことから、今回の見直しにより台風情報として継続できると考えています。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 温帯低気圧になると伝えられることで防災体制が緩むことが考えられるため、完全に通り過ぎるまで「温帯低気圧に変わりました」というコメントは差し控えたほうがよい。 ・ 台風が風の強いまま温帯低気圧に変わる場合には、台風の勢力が衰えて熱帯低気圧になる場合とは全く別物として強調すべきである。 	<p>温帯低気圧という言葉だけで防災体制が緩まないよう、過去の事例（例、洞爺丸台風など）を引用するなどして、台風から変わった温帯低気圧への防災の重要性についての周知に努めてまいります。</p> <p>また、ご指摘のとおり、警戒を弱めず、継続できるような情報発表のため、温帯低気圧に「強い」や「発達した」等の修飾語を付ける工夫を検討します。</p>

【雨風の分布】

指摘要旨	対応
<ul style="list-style-type: none"> ・ 暴風域に入る確率の面的情報は円にならず、地形の影響などでいびつな形になる。 ・ 地形効果や逆転層を考慮した最大風速分布予報を発表した方がよい。 	<p>技術開発の状況をふまえて、雨や風の分布情報を充実していくことで、ご指摘の改善を図っていきます。</p>

「台風情報の表示方法等に関する見直し（案）」へのご意見

意見 1 <千葉県>

自治体や企業の防災担当向け台風情報に関しては、多くの資料を提供することによって確保されるが、マスメディア（とくにテレビ）においては「わかりやすさ」が重要であるということをご承知のとおりと存じます。

まず、「台風は中心が通過することが一番恐ろしい」という視聴者の固定観念を変えることが重要である。

防災面での重要度を考えれば、「暴風警戒域」「最接近時刻」のプライオリティが高いと考えられる。

（台風情報に雨量予想を加えない、という前提で）

そこで、

- 1) 予報円を廃止し、点と線で表示する
- 2) 暴風警戒域ではなく、暴風域に入る確率の面的情報（50%以上の地域）を表示する

※暴風域に入る確率の面的情報は、予想到達点の後3時間予報が良い（防災の意味で）

暴風域に入る確率の面的情報は円にならず、地形の影響などでいびつな形になることもあるが、それが台風の正体である。

（表示方法は添付資料（JPEG画像）をご参照ください）



台風の進行速度が遅い場合の処理

- ・ 重なり大きい時間帯の予報（暴風域に入る確率の面的情報）を省く（添付資料の例では8日12時の警戒エリアは省いてあるが、情報は補線でおぎなう）

意見 2 <静岡県>

暴風域に入る確率は期間を通した分布図ではわかりにくいと思います。3時間、12時間、24時間ごとで区切った方がいいでしょう。
また、これとは別に地形効果や逆転層を考慮した最大風速分布予報を3時間ごと24時間先まで3時間または6時間おきに発表した方がいいと思います。

意見 3 <地域不明>

進路予報が円の場合、上陸2～3日前は九州から北海道までどこに上陸してもおかしくない表現に思える。予報の意味を成していない。上陸が近づけば当然場所がしぼられるはずなのに、暴風圏と称して円をつかっているので、どこに上陸するかまったく予報になっていないと思う。進路予報は線で正確に表すべきである。

意見 4 <神奈川県>

HPを見て、台風から変わった温帯低気圧の情報に関して意見があります。

風のこともそうですが、雨に関する情報も台風並みに流してほしいと思います。風もそうですが、これから述べる1986年(昭和61年)の台風10号のように温帯低気圧になっても、雨の降り方が全く衰えなかった台風もあるからです。

さらに統計上難しいかと思いますが、これらの温帯低気圧も上陸数に参考数値として計上してほしいと思います。

というのは、前述の台風10号が今でも鮮烈に記憶に残っているからです。

大雨で多くの被害を与えたにも関わらず、上陸直前で温帯低気圧化してしまい、結局統計上からは「1986年は台風上陸0個」ということが永久に残ることによって、この台風の記憶が完全に吹き飛んでしまうことが考えられるからです。

あと温帯低気圧になったことで防災体制が緩むことが考えられるため、温帯低気圧になっても完全に通り過ぎるまで「温帯低気圧に変わりました」というコメントは差し控えたほうがよろしいかと思います。

温帯低気圧でも風雨をもたらすことは知っていても気が抜けてしまうことが事実です。

さらに温帯低気圧になる場合は、台風が非常に強くても温帯低気圧化してしまう(中心気圧がほとんど上昇せずに温帯低気圧化、「強い台風」のまま温帯低気圧化)ケースもあると思います。

例) 1982年21号、1991年19号、いずれも970hpa台以下で温帯低気圧化
この場合は、台風の勢力が衰えて熱帯低気圧になるとは全く別物と強調したほうがよろしいかと思います。